

JNEPnews

Japan Network for Earth Environment and Prevention of Pollution (JNEP)

公害・地球環境問題懇談会

googleで検索 → jnep.jp

気候危機 & 再生可能エネルギー 私たちにできること



新宿駅バスタ前でスタンディングアクションするFFFTokyoの皆さんとJNEPの奥田さが子さん、東北大学教授の明日香壽川さん(2023. 12. 8)

目次

気候危機&再生可能エネルギー わたしたちにできること	
都留文科大学出前授業報告.....	2
同世代の行動により心動かされる.....	7
温暖化対策は苦痛ではない、未来につながる希望.....	8
ワクワクが大事.....	9
地獄の門を・・・.....	9
若いって凄い!.....	9
東京科学シンポジウムー若い世代との協同に展望.....	10
JNEP情報.....	11
豊田弁護士を偲ぶ会.....	12
活動日誌.....	12

都留文科大学出前授業報告

公害・地球懇常任幹事 奥田さが子

今年度も、都留文科大学で、3クラス計約130名の学生を対象に、気候危機と再生可能エネルギーを考える2回の授業をやりました。1回目の授業では、①気候危機の現状 ②どうして起こるのか ③日本と世界の対策の比較を学び、遅れた日本の現状をつくりだしている要因を考えるグループワークを行いました。グループワークの発表や、最後に書いてもらったレポートをざっと読んでまとめてみます。

- * 現状がこんな大変なことになっているとは知らなかった。何となく人ごとになっている。メディアの報道が少ない。
- * 世界の流れから、日本の対策がずっと遅れていると知ってショックだった。
- * CO₂の排出が、家庭より大企業で出す割合が多いということを知らなかった。
- * 日本は資本主義なので経済的に不利益になるものには取り組まないのではないか。
- * 政府は大企業の言うことを聞くだけで、対策をしていない。
- * 教育がこういう問題を取り上げていない。

などが出され、現状を学び、問題点を考えるというねらいはしっかり受け止めてもらえたという感触を持ちました。けれども、同時に再生可能エネルギーについては、

- * 価格が高く、コスパが悪い。
- * 地理的条件が悪くて、日本ではヨーロッパみたいにできないのではないか。
- * 発電形態や産業形態を変化させることは現状では経済、社会、生活レベルを下げることになる。
- * 電気の仕事をしている人の仕事がなくなる。

などの疑問が出されました。これらはかなり根強い思い込みになっているので、再エネについての誤解を解き、きちんとデータを出してメリットを説明する必要を感じました。

1週間後に2回目の授業。1回目を受けて、私たちに何ができるのだろうか、何をすべきなのだろうかと考え、一歩踏み出してほしいと、同世代であるFridays For Future(FFF)の大学生3人のレクチャーも柱に据えて進めました。再エネと原子力発電について前回だされた疑問は、今までメディアや政府にミスリードされてきたものであることを、専門家から送ってもらった最新のデータも使って説明し、かなりわかってもらえたようです。

FFFの3人は、自分がどんなきっかけでこういう活動をするようになったのか、気候正義とはどういうことか、デンマーク留学で考えさせられたこと、FFFの活動の楽しさやそれを通じて得た成果など、それぞれ自分の言葉で語ってくれました。同世代の考えや頑張りを知ることが、とても刺激になったことは最後のレポートからも伝わってきました。

グループワークでは再エネについて、検索のやり方を例示して自分の出身自治体の取り組みを各自のスマホで検索してグループで共有し、話し合う時間を設けました。全国から学生が来ているので、進んでいるところ、ほとんど取り組んでいないところ、様々ある日本の実態が浮かび上がってきました。身近な具体例を調べる体験やそれをもとに話し合うことを通して、マイボトルやマイバッグだけで済むものではない気候危機対策をすすめる取り組みについて考えられたのではないかと思います。



FFFの3人の話は、一緒に授業をしたシニアの私たちの心も打ちました。私たちが学生だったころに比べ、上からの管理や同調圧力の強さの中で「活動に参加する」ことのハードルがとて高くなっていることも感じましたが、最後のレポートで、とにかく関心をもって学びたいと多くの学生が記述し、これからそういう活動をしてみたい、SNSで調べて発信することからやってみようとしてくれた学生がいたことは、これからの希望。教師を目指す学生が多い大学だけに、近い将来子どもと一緒にぜひ考えたい、とたくさん書かれたのも心強いことです。

以下、学生のレポートからいくつかを抜粋して紹介。
(3クラス計約130人×2回分)

①温暖化の現状を知って、どんなことを思い、考えたか。

◎自身の「無知」を痛感する時間となった。私のこの状態から日本国民の姿が見え、他人事ではないと強く思う。知らないままを通すのではなく、知ろうとする姿勢、変えようとする意志を大切にしていきたい。

◎日本は温暖化の加害国であると考え、危機感を感じる。私たちのこれまでの危機感の欠如により、8億5000万人の子どもたちが厳しい生活を送っているのだと知った。日本の排出量はワーストクラスに位置しているのに、再エネの達成率は国際的にみて低いなど責任を感じずにはられない。

◎利益だけを求め続けてきた資本主義の限界が、異常気象という形で現れてきている。目先の利益だけでなく、この先長い地球環境のための考え方が必要になっている。

◎加害国日本という言葉に驚きドキッとした。こういう状況を知る機会の少なさもあると思う。メディアが報道していないことで知識が不足しているように感じた。

②世界の温暖化対策と日本の現状について、グループワークを通して考えたこと

◎富裕層の資本追求の在り方と、私たち国民や教育の問題が明らかになった。自分たちの欲、先のことなど見ないようにする今重視の姿勢、知らないこと、主張しないこと、現在の日本の課題、私自身の課題を問題視し、何ができるか考えていきたい。

◎日本人の国民性や政治意識、資本主義における利潤追求、資源のなさなど様々な意見が出た。いろいろな要因が重なって問題解決の停滞が起こっていると思う。

◎変化を嫌う日本の国民性、利益を手放すことができない日本の大企業やその利益にすぎる日本政府も原因だと思う。

◎教育に問題があると感じた。私もこういう教育は受けてきていないし、知識がないので行動につながらない。また主権者としての教育が不足していて行動するための資質・能力が足りないと思う。ちいさい時から環境問題に触れ、行動できる3.5%を育てていくのが教師になる私のひとつの役割と思う。

◎3.5%のように少なく感じる人でも社会を変えることができるが、日本人は自己表現をしようとしなからなかなか難しいと感じた。政治家も企業の利権、自分の立場を守るために必死の実態があり、同調圧力もあり本当に難しい。日本にいと温暖化の深刻さを感じることがとても少ないが世界に目を向けると苦しんでいる人が多くいる。みんなで考えなくてはならない。

3.5%の説明

ハーバード大学の政治学者エリカ・チェノウェス教授の研究で、賛同する人数が人口の3.5%を超える運動は成功する確率が高く、それも非暴力のものは成功率が2倍になるという結果が、世界中で注目を集め、「3.5%ルール」と呼ばれるようになった。

③日本の現在・未来についてどのようなことを考えたか。自分たち自身と子どもたちの未来のためにどんなことができるか。どんな一歩を踏み出してみたいか。

◎各自治体で取り組まれている再エネの取り組みは様々で興味深かったが、このような取り組みもこのような機会に調べなかったら知ることすらできなかつたと思う。友達でも家族でも、気軽に話してみるだけでも広がっていくと思う。

◎ひとりひとりが調べたり選択したりすることが大切だと気づくことができたので、アンテナを高くし、意見を発信する行動力を持っていきたい。

◎まずこういった活動を知っていくことが大切だと思った。同世代の人が市民運動をしていることを初めて知ったので、SNSなどもっと利用して多くの人に知らせていくことが本当に大切だと思った。知っていくことで行動していく。

◎再エネの地産地消を実現させることが日本で再エネを普及させていくことに大きな影響があると感じた。大都市の電力をどこで生産するかを考えること、景観をどのようにして守っていくかという点でも考えていくことが大切だと思う。

◎FFFの活動や「気候正義」の話を聞いて環境問題を自分事として考えることが必要だと感じた。それで自分の行動も変えていけるので自分で調べることから始めたい。

◎市民運動によって、市の計画が変わったというエピソードはすごいと思った。自らが主体となって行動することで、少しずつ良い方向へ変えることができるのだと思う。今日は調べて話し合う活動をしたが、教員になった際には、それらを子どもたちに話す機会を設けるなど、行動につなげられるように取り組んでいきたい。

◎日本は先進国の中でも環境問題への意識が薄いことを非常に残念に思う。技術がかなり高いにもかかわらず事態が改善されないのは、政府と今のエネルギー供給側との強い癒着があるために進まないのだろう。私たち市民も活動すれば少しでも状況が改善できるはずなので、身近なところから取り組みを実践していこうと思う。

◎様々な取り組みがされているが、広報だけでなく教育にも課題があって子どもの時知ったり考えたりする機会がなかった。もったいないと思った。お話の中で、3人で働きかけて自治体の方針を変えることができたり、生徒会が活動している事例を知ったので、こういった教育からの活動を増やしていきたい。

◎自分の役割ややれることが見つかってよかった。今までは、自治体や政府が中心で動いていると思っていて環境活動への取り組みも、参加し積極的に活動への意識を変えていくことでよい方向へつながっていくのだと気づいた。今を生きる私達だが、将来の子どもたちのことも視野に入れながら活動していかなければと思った。

◎今日来てくれた学生のように、私達でも声をあげて再エネについて語るができることを知った。子どものうちから正しい知識を身につける機会が多くあればさらに良い未来が来るのではないかなと思う。

2050年までにカーボンニュートラルを目指すと言っている自治体は多いけれど、実際に行われている具体的なものはなく「推進しています」という文末ばかりで残念に思った。宣言して満足している現状があるような気がする。2050年までに、とか今の政府や自治体のトップが達成する目標でなく将来の人達に「何とかしてね、目標は立てておくから」と言っているようで、もっと短期間に実現可能な目標を立てて見通しを持った政策にするべきだと感じた。

◎市民が声をあげるのは大切。何とかしてくれと一方的に要望を伝えるのではなく、具体例で対話を重ねていくことが大事だと思う。目標として大きな数字が掲げられたことに満足するのではなく目標を達成するために現政府が何をしているのかをしっかりと見る必要があると思う。

◎様々な取り組みがあることがわかったが、あまりにも私たちが知らないのはなぜだろう。本当に温暖化への危機感が薄いし、知らないことが多すぎて、こうして授業をしてもらわないと知るきっかけがつかれないのはよくない。グループ内で各自治体の取り組みを見て、「こうしたほうがもっと良くなるのでは」という意見が出たので、取り組み方法も見直す必要があるし、私たちももっと声をあげていかなければならないなと感じた。

◎FFFの方の話で市民のエネルギーが実際に自治体を動かしているという事例を初めて耳にし、小さな行動でも持続可能な社会の可能性を広げられるのではないかなと思う。

◎再エネは難しく、大変なので取り組みが進んでいないのだと思っていたが、考え方がまったく変わった。まだまだ再エネのことを理解していない若者は多いと思うので、このような授業や講演会などで増やすべきだと思う。FFFのように同年代の若者が活動することで、若者同士での協調性が生まれ、意識改革につながっていると思った。

◎私は、選挙にちゃんと行こうと思った。環境政策に積極的に取り組んでいる候補者に投票できるように、アンテナを張って情報を集めたい。団体の取り組みにも参加してみたい。実際に活動している人の話を聞いて良かった。

◎温暖化というのはもはや未来のことではなく「今、現在」として捉えることが重要だと気づいた。学校の教師になったらFFFのような活動もあると教えた。

◎世界は変化しようとして動き出しているのに、私も含め日本人は今の現状についても知らない人が多い。デンマークのように上に立つ人の言うことを聞いているばかりではなく自分たちでできることをさがしていくべきだと思う。

◎FFFの話聞いて、デモ行進やスタンディングアクションも、現代風になっていて参加しやすい形になっていることに驚いた。まだ活動に参加する勇気はないけどスタンディングアクションとかを見たら、足を止めて見るようにしてみたい。将来教師になれば子どもたちに話したいなと思った。

◎日本はただでさえ再エネ推進が遅れているのに政府がその危機を感じていないいうえ、世界の足を引っ張っている話を受けて、正直、いい加減すぎる政治を変えていかなければ未来はよくなるのではないかなと思った。



この出前講座のあと、担当の先生から、次のようなお礼のメールをいただきました。

「授業のまとめレポートを読み返しなが、改めて大変有意義な授業が行えたことを実感し、学生たちのこれからの学びや行動に期待したいと思います。このような機会を得られましたこと、協力して良い授業を創ることができましたこと、本当に有り難く、改めてお礼申し上げます。」

そして2回にわたる授業の後、タイミング良く、NHKが「クローズアップ現代」で『～地球沸騰の世界～急増“気候難民”故郷を追われた先に・・・』をやっていたので、授業のはじめにみんなで視聴しました」と、感想のレポートを送っていただきました。下記はその一部です。

◎例えば戦争というものは、人と人が直接殺し合うものであり、その非道さや悲惨さは目に見えてわかりやすい。人を殺すことは悪いことだという意識は当然あるので、戦争反対という声もよく聞かれる。一方で、温暖化による他国の影響は目に見えづらく、実感がわいてこないというところが現状である。だが、我々一人ひとりが本当に少しの二酸化炭素を排出していったことが積み重なって莫大な量となっていく、その結果映像で出てきたように人々の死につながっているのだと分かった。それは結果的には間接的に殺人に加担していることと同じであり、そう言った意識のもと、一人ひとりが少しずつでも努力していく必要があると考えた。

◎今まで気候変動の問題を考えると、気候難民の方々の人権を侵害しているという事実気づくことができませんでした。言葉では「人の権利を守らなければ」と言っているのに、気候難民の方々の人権を守る行動は何一つできていなかったと思います。「何でも手に入ってしまうと世界規模の問題に気づけないかもしれない」という言葉にはっとさせられました。人権を侵害しているという事実少しでも多くの方が気づけるように教育の力を借りたいと思います。

同世代の行動により心動かされる

都留文科大学4年 三藤心瑚(みとう ここ)



私はこの授業の受講生として2年前に橋本先生や奥田先生の講義をお聞きした。その当時は本やSNSから既に気候変動への大きな危機感を覚えていたが、行動を起こすことは精神的にハードルが高く、なかなか動けずしていた。そのような時に橋本先生や奥田先生の強い思いが非常に胸に刺さり、「自分にできること、自分がすべきだと思うことをとにかくやらなければ」という気持ちが一気に沸き起こった。その頃は衆議院議員選挙の期間であったため、私たちの未来のために投票を呼び掛けるビラ配りを行おうと決めた。授業終了後すぐにビラ制作に取り掛かり、投票に関する情報をまとめた。

そして大学や都留市の選挙管理委員会に許可を得て、都留文科大学生の10人に1人に行きわたる300枚のビラを配り切った。この行動で何人もの友人から「投票に行くことにしたよ」と嬉しい言葉をもらった。今回は講義を通じて私のように何か心や行動に良い変化を起こすことができるという想いで臨んだ。

私が主に話したのはデンマーク留学で感じた市民の力や日本との相違点についてだ。デンマークは再生可能エネルギーの普及先進国であるが、そのような社会を作り上げてきた一つの大きな要素は市民の力にあると考える。実際デンマークで約半年間の生活をし、デンマークで生きる人々は社会への責任を持ち、市民として行動を起こすことに力があることを認識していると様々な場面を感じた。またそれらと強く結びつくのが報道の自由度、メディアや政治の透明性、デンマークの教育等にあると考える。このような話に付き物だと感じるのが、「でもデンマークと日本は全く違うから。」という考えである。

しかしこれでは思考停止に陥り、次に進むことができない。よってこの話の最後には「デンマークの事例などが全く役に立たないと切り捨ててしまうのではなく、日本と比較してどのような違いや共通点があるのか、取り入れることができるのはどのようなことかをまずは議論し始めることが大事である」とまとめた。

その後、受講していた学生と授業内で話し合った時間や授業感想文からいくつかのことを感じた。まずは同世代の行動が社会を変えているということに多くの学生が心を動かされていたことだ。各団体がSNS等で活動内容を発信していても、関心をあまり持っていない方々にはやはりアクセスされにくいと感じる。今回は直接話をすることができ、これから教育に携わっていく未来の教員に知ってもらうことができた。

学生からは「将来子どもたちと学び考えていきたい」という声もあり、学びの広がりを楽しんだ。ただ、現状を知り考えてもらう中で、言い訳のような声を耳にすることもあった。「この自治体は大きいから実行できてるのでは」「私の地元は田舎で規模も小さいから難しい」「政府と企業の癒着があるから難しい」などだ。だが、それでは一向に前進することができないだろう。よって逃げ道を考えるのではなく、どうしたらできるのかを考えていけたらと思う。その一つがもっと知り考えることであったり、自分の声を届けることであったりするだろう。

最後に今回の講義を通じて知ってもらうこと、対話することの大切さをより一層感じた。また私自身が経験したように、私たちの言葉が学生の心の種まきとなり、いつかはそれが芽生え、行動に変わっていったらと思う。今後も勇気を持って行動していきたい。

温暖化対策は苦痛ではない、未来につながる希望

葛飾青空の会共同代表 森倉次郎

11月25日、なぜ日本は環境政策において世界の周回遅れなのか？をテーマに東京葛飾医療生協会議室で学習会が行われました。講師を含め、葛飾青空の会・新日本婦人の会葛飾支部、東京葛飾医療生協の会員・組合員の22名が参加しました。冒頭、中村伸吾区議(日本共産党・葛飾青空の会共同代表)が環境対策対区交渉に参加した感想と歪んだ青木区長の政治姿勢に言及、引き続き奮闘することを表明しました。



初めに、「大気汚染と地球変動STOP!」と題して大越愼秋さん(東京公害患者と家族の会副会長・葛飾青空の会顧問)が基調報告、大気汚染の主役PM2.5と温暖化により死亡含む複合健康被害の増加とCO2削減に取り組まなければ海面上昇、巨大台風、竜巻、集中豪雨、新たなウィルス発生、森林火災などの多発、さらに食料生産危機による暴動などの懸念について言及し、CO2削減は喫緊の課題であると結びました。

FFF Tokyoの田原美優さん(大学4年生)は活動に参加するようになった契機に触れ、温暖化に対する自らの加害性への気づきと気候正義について語りました。気候正義とは世界人口の10%の人が90%のCO2を発生させる一方、90%の人は10%しかCO2を発生させていないのに温暖化による被害は10%しかCO2を発生させていない人々が甚大な被害を受けている。

それっておかしくない？正義に反してない？と考える地球人すべて特にCO₂を大量に発生させている先進国への強烈な問題的提起になっていると話しました。

また、自分自身デモには暗い印象を持っていたがやり方次第、明るく楽しくやった自らの経験をもとに語りました。活動はワクワクするような目標を掲げてやりたいとも。

日本政府は温室効果ガスの削減目標を2013年に比して2050年には46%としているが自らの住む自治体である国立市に46%よりはるかに高い削減目標を設定するように仲間と働きかけているとワクワクの中身の一部を紹介しました。その後、2名の報告を受け討論を行いました。

討論は橋本良仁さん(公害・地球環境問題懇談会常任幹事)をコーディネーターに、参加者から次々に質問や経験が出されました。討論の中で日本の環境対策の周回遅れは“知らされていない＝マスコミの政府忖度”や忘れさせられている日本の異常、温暖化対策＝苦痛ではない未来につながる希望、一人ひとりが自らの問題として捉えることの大切さが共有されました。

先の先進国サミットで国連事務総長が地球沸騰化について「地獄の釜を開けた」と表現したということも紹介されました。危機的状況にある現状を学ぶ良い機会になりました。

ワクワクが大事

FFF Tokyo 大学4年 田原美優



私が学習会などでお話しさせていただく際には、冒頭で必ず、その学習会で目指すゴールを提示します。ゴールとは、参加者みんなが<ワクワク>することです。日々取り組む活動を持続可能で意味あるものにするには、<ワクワク>が大事だと思うからです。

今回の葛飾青空の会での学習会は、今まで私がお話ししてきた学習会の中で一番、参加者がワクワクしていると感じました。私の話を聞いているときの表情や、笑いや、そのあとの討論、何人もの方が学習会後に私に温かい声をかけてくださったことから、そう感じました。

会場にいたみんなの活動へのエネルギーや希望がうずうずと膨らんでいる空気を感じました。

私自身もとてもワクワクしました。一生懸命社会を良くしようとする人がこんなにたくさんいるのだとわかったからです。また、大気汚染と気候変動に取り組む人たちが連携する道が見えたからです。私は早速、この連携を形にしようと思いました。



11月30日から12月12日にかけて、アラブ首長国連邦でCOP28という気候変動についての国際会議が行われます。その際、私が所属する Fridays For Future Japanは日本政府に対して声明文を出します。

その声明文の中に、「クリーンエネルギーの導入や持続可能な運輸などの緩和策によって大気の質を改善し健康のコベネフィット(ひとつの活動が様々な利益につながっていくこと)を生み出すこと」を加えました。これからもワクワクを大事にしながら問題や世代を超えて連携していきたいです。

学習会の感想

地獄の門を・・・

葛飾・金町 菅野勝祐

「ポーっと生きてんじゃネエよ！」チコちゃんの叱り声が聴こえてきそうな田原美優さんの話でした。大気汚染も、気候変動も、そして原発被害も自然界の流れみたいに受けとめていたら、被害者ではなく、加害者になってしまう。

「人類は地獄の門を開けてしまった」もう遅いのか？今すぐ知って行動に移すことによって、失われた30年を挽回する最後のチャンスだ、苦痛ばかりではなく、「未来には希望がある！」このことを教えてくれた学習会だった。皆んなで声を！行動を！がんばりましょう。

若いって凄い!

葛飾・水元 中村初枝

孫世代の田原美優さんの報告に元気をいただきました。

グretaさんの活動に触発されたその行動力に、若いって凄い！と感動です。

気候変動はもう待ったなしです。地球がどんどん変化して先行きが心配です。私は最近若い人たちの行動に注目し希望を感じています。

ジェンダー平等の考え方や、自分たちの周りから、より良い暮らし方や生き方、誰もが生きやすいものに変えて行こうと、懸命に努力する人たちの活動に触れることが多くなりました。私達高齢者も頑張りますよ。ともに歩んでいきましょう。



東京科学シンポジウムー若い世代との協同に展望

エネルギー問題研究者 佐川清隆

12月10日、日本科学者会議東京支部の東京科学シンポジウム第5分科会「2035年を見据えた気候変動対策の課題と市民社会の役割」は、公害・地球懇(JNEP)も共催して都内の拓殖大学で開催され、会場14人、オンライン6人の20人が参加しました。

冒頭のJNEP長谷川事務局長の挨拶に続き、佐川が「2035年の電力・エネルギーをめぐる国内外の動向について」を報告。2024年各国はCOP29に向け、2035年を含む新たな目標を提出することになっており、国内では第7次エネルギー基本計画が出されることから、2035年の目標引き上げについて運動を強めていかねばなりません。それらの意思決定に向けて将来世代の意見が重要であることを確認しました。最近、2035年までの電力部門の完全ないし概ねの脱炭素化がG7で合意されたことが紹介され、日本でも急速な転換が求められることとなります。続いて、奥田さが子さんは、「若い世代や学校現場で気候危機問題を考えるために」と題して、和光中学校・自由の森高等学校、都留文科大学での出前授業の取り組みを紹介しました。授業の事前アンケートでは、「再生可能エネルギーなんて知らない」と答えた学生が半分もいたけれど、授業を通し、また同世代であるFFFの学生と協働した授業の工夫もする中で、認識を深め、自分たちに何ができるかを考えはじめたということ、授業後の感想やレポートも示しながら報告しました。

Fridays For Future Tokyo(FFF)大学4年生の田原美優さんは、「若者の気候ムーブメントが目指す社会」と題し、ご自身の思いや取り組みをリアルに交えながらFFFの目的や政策について紹介。

「気候正義」をめざす立場から、温暖化の被害だけでなく加害の責任も意識しながらやっていること、街角での対話や参加しやすいデモンストレーションを工夫してがんばっているという報告は参加者の共感をえました。



FFF Tokyoの新宿駅前
デモンストレーション

質疑では、親の反対や周囲の目をどう感じているかといった問題での議論が盛り上がりました。

産総研の歌川学さんは、「2050年排出ゼロに向けた脱炭素対策と2035年目標」と題して、日本全体と地域の対策についての報告をしました。日本全国では、既存技術中心で2030年に2013年比で70%削減、2035年には同80%の削減ができると定量的に示し、国全体では光熱費の削減効果が投資額を大きく上回る対策であることを紹介。地域は多排出事業所があるかどうかで大きく様子が異なるが、それぞれの地域で大幅な削減が見込めるといことでした。

今回の報告を出発点にして、今後の削減目標引き上げや具体的な対策を実施させるために若い世代とも協力した取り組みを進めたいと決意を新たにしました。

JNEP情報(2023年12月)

気候変動枠組条約会議合意で化石燃料依存からの脱却

温暖化対策の国連気候変動枠組条約の会議が11月末からアラブ首長国連邦で開催され「化石燃料依存からの脱却」が合意に盛り込まれた。気温上昇1.5度未満抑制の重要性を確認、世界の温室効果ガスについてIPCC(気候変動に関する政府間パネル)最新報告の1.5度抑制のための2030年43%削減、2035年60%削減(2019年比)、2050年実質ゼロの重要性、この10年の対策の重要性を確認した。

国連再生可能エネルギー機関(IRENA)は、2030年までに世界の再生可能エネルギーを現在の3倍に、エネルギー効率(省エネ)を2倍にすることを求め、条約会議で3倍にすることに日本も含め多くの国が賛成した。だが、日本は現在の再生可能エネルギー電力割合が20%と欧州の半分以下なのに、今のエネルギー基本計画では2021年の再エネ電力発電量、割合とも3倍どころか2倍にもならない。

一方で米国などは原発3倍を提案、日本は賛成した。

石炭ゼロは合意に明確にもりこまれずに「石炭の削減」のまま。条約会議で岸田首相は今後石炭新設を行わないと演説したが、JERAの横須賀石炭火力、電源開発の松島火力が建設、運転予定である。先進国では2030年石炭火力ゼロを目指す連合に米国、チェコが加盟、G7で未加盟は日本だけである。IEA(国際エネルギー機関)の2050年ネットゼロ報告では、先進国は2030年石炭火力ゼロ、2035年に発電所の排出ゼロを求めるが、日本は「ゼロエミッション火力」という言い逃れで2050年まで火力発電を継続予定。

今後「棚卸し」といい、各国の実態と目標を2025年まで詳しく点検、各国目標のままでは気候危機回避にどれだけ不十分なのかを詳細に点検し条約会議で2030年、2035年の取り組みが議論される。

豊田誠弁護士を偲ぶ会



3月16に亡くなられた豊田誠弁護士を偲ぶ会が12月2日プラザエフにて行われました。豊田弁護士は公害・地球懇の代表幹事として公害をなくすために尽力してこられました。イタイイタイ病をはじめとして、水俣病、薬害スモン、多摩川水害、ハンセン病などの公害問題の解決のために運動をリードされたことを、それぞれの運動の関係者11人が故人を懐かしみながら話されました。

豊田弁護士の暖かくて優しい人柄とユーモアあふれるエピソードなどから、どなたからも慕われていたことがうかがわれます。

公害・地球懇からは牛山積代表幹事が追悼の言葉を述べられました。

活動日誌

11月

- 2日(木)第6次環境基本計画中間まとめへのパブコメ切
- 8日(水)原発被害津島訴訟 仙台高裁
- 12日(日)原発被害東京訴訟 東京高裁判決前集会
- 16日(木)都留文科大学出前講座
- 17日(金)原発市民連絡会発足 シンポジウム
- 18日(土)環境・公害セミナー(PFAS) 連合会館
- 22日(水)だまっちゃおれん！ 原発被害愛知・岐阜 名古屋高裁判決
- 23日(木)都留文科大学出前講座
- 25日(土)葛飾青空の会学習会 「大気汚染・気候変動」
- 28日(火)リニア新幹線訴訟 判決
- 30日(木)原発被害大阪訴訟 大阪地裁

12月

- 2日(土)豊田誠弁護士を偲ぶ会
- 3～4日総行動総括方針(合宿)
- 7日(木)第3次横田基地訴訟 立川地裁
- 8日(金)COP28緊急アクション JR新宿駅南口 スタンディング (FFFTokyo)
- 9日(土)自治研究集全体会議・名古屋
- 9日～10日第22回東京科学シンポジウム (日本科学者会議東京支部主催)
- 12日(火)原発被害京都訴訟 大阪高裁 本人尋問
- 13日(水)飯館村原発被害者訴訟 東京地裁
- 14日(木)原発被害かながわ訴訟 第2陣 横浜地裁
- 15日(金)原発被害最高裁要請行動
- 16日～17日 公害資料館連携フォーラム 福島大学
- 18日(月)ノーモアミナマタ東京 東京地裁
- 19日(火)全国大気環境省保健部交渉

今後の日程

12月

- 19日(火)全国大気環境省保健部交渉
- 22日(金)原発被害千葉訴訟第二陣 東京高裁判決
- 26日(火)原発被害東京訴訟 東京高裁判決

2024年

1月

- 17日(水)原発被害山形訴訟 仙台高裁判決
- 26日(金)かながわ原発被害訴訟 東京高裁判決
- 31日(水)第49回総行動 第1回実行委員会

2月

- 5日(月)原発被害津島訴訟 仙台高裁
- 10日(土)原発被害全訴連総会 日比谷コンベンションホール

発行 : 公害・地球環境問題懇談会
(公害・地球懇/JNEP)
連絡先 : 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-3
サニーシティ新宿御苑10F
TEL 03-3352-3663
FAX 03-3352-9476
郵便振替 : 00140-1-80892
加入者 公害・地球環境問題懇談会
URL : <http://www.jnep.jp/>